

Clinical Characterization of Vonoprazan- Refractory Gastroesophageal Reflux Disease

濱田, 匠平

<https://hdl.handle.net/2324/4060036>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	濱田 匠平
論文名	Clinical Characterization of Vonoprazan-Refractory Gastroesophageal Reflux Disease
論文調査委員	主査 九州大学 教授 笹栗 俊之 副査 九州大学 教授 中村 雅史 副査 九州大学 教授 澤 新一郎

論文審査の結果の要旨

胃食道逆流症 (GERD: gastroesophageal reflux disease) は、胃内容物が食道へ逆流することによって不快な症状や合併症を認める疾患である。約30%の高い有病率を有するありふれた疾患であるが、その辛い症状から生活の質ならびに労働生産性を低下させ社会に大きな影響を及ぼす重要な疾患である。新しく開発されたプロトンポンプ阻害薬 (PPI: proton pump inhibitor) であるボノプラザン (カリウムイオン競合型アシッドブロッカー) は、従来のPPIと比較してより高い胃酸抑制能力を示すと考えられている。そこで申請者らは、難治性GERDの臨床がボノプラザンの登場によってどのように変化したかを明らかにしようと本研究を行った。

難治性GERDを、従来型PPIによる治療に抵抗する群とボノプラザンによる治療に抵抗する群に分け、食道生理機能検査である高解像度食道内圧検査と24時間食道内インピーダンス/pHモニタリング検査 (MII-pH)によりそれらの病態を後ろ向きに調査し、両群に含まれる各病態 (逆流性食道炎、非びらん性GERD、逆流過敏性食道、機能性胸焼け、食道運動異常症) の割合を比較検討した。その結果、ボノプラザン群においては、逆流性食道炎や非びらん性GERDといった酸に関連する病態は全く認められなかった。これと一致して、ボノプラザン群の食道下部酸暴露時間及び胃内pHが4未満となる時間は、従来型PPI群のそれと比較して有意に短かった。以上の結果から、ボノプラザンは、強い胃酸抑制能力により酸関連GERDを除外するための有効な診断ツールと成り得ることが強く示唆された。

以上の成績は、この方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられた。本論文についての試験で、まず研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め、次いで各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったところ、おおむね満足すべき回答を得た。

よって調査委員合議の上、試験は合格と決定した。